

巻頭言

橋梁技術者の品格

法政大学 工学部 都市環境デザイン工学科 森 猛

先日、四谷の駅前で、路上禁煙に関して「マナーからルールへ、そしてマナーへ」といったことが書かれた看板を見かけました。喫煙者の私にとって耳（この場合は目でしょうか）の痛いものでしたが、納得もしました。一部の心無い喫煙者がマナーを守ることができないために、ルールができてしまったのでしょうか。

読まれた方も多いかと思いますが「国家の品格」（藤原 正彦 著、新潮新書、2005年11月）という本が話題になりました。特にバブル崩壊以後、米国流の論理主義の仕組みが日本に浸透し、倫理・道徳に基づいていた日本の社会がますますおかしくなってきたのではないか、見直すべきではないか、というのがこの本の趣旨だと判断しました。日本人特有の道德感、強者が弱者を攻めることは卑怯だとか、年長者を敬う、人目を気にするといったことが疎かになっているようにも感じます。また、貸し借りや口約束を大事するといったことも、軽視されるようになったように感じます。そのため、契約が大事にされ、またISOのような証拠主義が重用されるようになったものと考えています。大学では、教育の証拠を残し、それを審査するJABEE（日本技術者教育認定機構）という仕組みも一般化しました。もちろん、ISOやJABEEにもよいと思うことはたくさんありますが、そこまで人を信用しないのか、無駄な作業を増やしているのではないかと思うところもあります。先述の喫煙マナーや今話題の「不二家」問題などから考えると、一部の心無い人に対するためには、仕方がないのかも知れません。どちらがよいのかはわかりませんが、最近流行の言葉「モラルハザード」「法令順守」「技術者倫理」と並べてみると、論理主義・証拠主義に向かって行くのでしょうか。また、現状ではそれを認めざるを得ないのでしょう。

技術者、技能者という言葉がよく使われます。中学2年生の娘に聞いたところ、技能者の方が“立派に聞こえる”とのことでした。鋼橋関係の業務を設計、施工、維持管理にわけて考えると、技術者、技能者とはどのような方でしょうか。人によってイメージは違うかと思います。スーパー大辞林によれば、技術は「①物事を巧みにしとげるわざ、②自然に人為を加えて人間の生活に役立てるようになる手段。また、そのために開発された科学を実際に応用する手段」、技能は「物事を行う腕前」とあります。私なり考えた技能者の役割・イメージは以下のようです。

設計技能者：基準にしたがって、設計ソフト等を使って間違いなく設計できる、また設計図を描ける者

施工技能者：溶接、塗装、検査などを決められた方法で確実にできる者

維持管理技能者：決められた方法で、確実に点検し、損傷のランク分けができる者

これらに関して、異存は少ないものと想像します。それでは、技術者はどうでしょうか。現在、技術者と呼ばれている方、称している方の多くは、技能者と区別できないのではないのでしょうか。また、技術の意味①に偏っているのではないのでしょうか。もちろん①の役目も、技能者としての能力をある程度身に付けることも大事でしょう。②については、どうでしょうか。②の意味で技術者に求められることは、当該分野に関する現在の知識を確実に身に付け、それを設計、施工、維持管理に活かすこと、新たな問題が生じたときに、その問題点を整理し、解決するためのアプローチの方法を見つけ、解決策を見出せる能力を有すること、また各業務に何が求められているか、なぜそれが求められているかを技能者に正確に伝えられること、そして技能者の業務（成果品）を正しくチェックできることではないかと私は考えます。

また家族の話ですみません。1年ほど前になりますが、女房と一緒にエアコンを買いに出かけました。もちろん機能と値段を気にしましたが、それよりも女房が優先したのはブランドでした。その理由を尋ねたところ、信用しているブランドの製品であれば、故障が少なく長持ちするという印象を持っている、これまでの経験からもそれが事実と思っているからだ、という答えでした。私は、表示されている性能や保障期間が同じであれば、安いほうがよからうと考えていましたが、決定権を有する女房の意見に従いました。ブランド作りに広報・宣伝が果たす役割も無視できないかと思いますが、安心して長く使える製品を作り出す技術者と技能者なくしてブランドを確立することができないのも事実でしょう。

品格とは「そのものから感じられる厳かさ」とのことのようです。近寄りがたい人を圧するような厳かさとは言いませんが、鋼橋関係の技術者には、先述の②のような能力と従来の日本独自の倫理観・道徳感、すなわち技術者としての品格を身に付けてほしいと願っています。それが、技術者としての誇りと組織・製品のブランドに繋がるのではないのでしょうか。そして、まさに人間の生活に役立つ、安心して長く使える橋を設計・施工・維持管理していただきたい。

最後に、余談ですが、研究とは「新しい知識を生み出すこと」と私は考えています。私も鋼橋関係の研究者の端くれのつもりですが、新しい知識を生み出し、多くの技術者とともに鋼橋の安全・安心のために少しでも役に立ちたいと願っています。